**聖霊降臨節第19主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 2024年9月22日**

**「愛がなければ」**

**申命記6章4～5節**

 **6:4 聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。**

 **6:5 あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。**

**使徒言行録19章21～40節**

 **19:21 このようなことがあった後、パウロは、マケドニア州とアカイア州を通りエルサレムに行こうと決心し、「わたしはそこへ行った後、ローマも見なくてはならない」と言った。**

 **19:22 そして、自分に仕えている者の中から、テモテとエラストの二人をマケドニア州に送り出し、彼自身はしばらくアジア州にとどまっていた。**

 **19:23 そのころ、この道のことでただならぬ騒動が起こった。**

 **19:24 そのいきさつは次のとおりである。デメトリオという銀細工師が、アルテミスの神殿の模型を銀で造り、職人たちにかなり利益を得させていた。**

 **19:25 彼は、この職人たちや同じような仕事をしている者たちを集めて言った。「諸君、御承知のように、この仕事のお陰で、我々はもうけているのだが、**

 **19:26 諸君が見聞きしているとおり、あのパウロは『手で造ったものなどは神ではない』と言って、エフェソばかりでなくアジア州のほとんど全地域で、多くの人を説き伏せ、たぶらかしている。**

 **19:27 これでは、我々の仕事の評判が悪くなってしまうおそれがあるばかりでなく、偉大な女神アルテミスの神殿もないがしろにされ、アジア州全体、全世界があがめるこの女神の御威光さえも失われてしまうだろう。」**

 **19:28 これを聞いた人々はひどく腹を立て、「エフェソ人のアルテミスは偉い方」と叫びだした。**

 **19:29 そして、町中が混乱してしまった。彼らは、パウロの同行者であるマケドニア人ガイオとアリスタルコを捕らえ、一団となって野外劇場になだれ込んだ。**

 **19:30 パウロは群衆の中へ入っていこうとしたが、弟子たちはそうさせなかった。**

 **19:31 他方、パウロの友人でアジア州の祭儀をつかさどる高官たちも、パウロに使いをやって、劇場に入らないようにと頼んだ。**

 **19:32 さて、群衆はあれやこれやとわめき立てた。集会は混乱するだけで、大多数の者は何のために集まったのかさえ分からなかった。**

 **19:33 そのとき、ユダヤ人が前へ押し出したアレクサンドロという男に、群衆の中のある者たちが話すように促したので、彼は手で制し、群衆に向かって弁明しようとした。**

 **19:34 しかし、彼がユダヤ人であると知った群衆は一斉に、「エフェソ人のアルテミスは偉い方」と二時間ほども叫び続けた。**

 **19:35 そこで、町の書記官が群衆をなだめて言った。「エフェソの諸君、エフェソの町が、偉大なアルテミスの神殿と天から降って来た御神体との守り役であることを、知らない者はないのだ。**

 **19:36 これを否定することはできないのだから、静かにしなさい。決して無謀なことをしてはならない。**

 **19:37 諸君がここへ連れて来た者たちは、神殿を荒らしたのでも、我々の女神を冒涜したのでもない。**

 **19:38 デメトリオと仲間の職人が、だれかを訴え出たいのなら、決められた日に法廷は開かれるし、地方総督もいることだから、相手を訴え出なさい。**

 **19:39 それ以外のことで更に要求があるなら、正式な会議で解決してもらうべきである。**

 **19:40 本日のこの事態に関して、我々は暴動の罪に問われるおそれがある。この無秩序な集会のことで、何一つ弁解する理由はないからだ。」こう言って、書記官は集会を解散させた。**

1.

**私は小学生の時の修学旅行で京都に行きました。嵐山、清水寺、金閣寺、銀閣寺、二条城、映画村など有名な観光地を回りました。田舎の小学生にとって京都の綺麗な景色はとても魅力的に見えました。その時に、金閣寺の小さな模型をお土産にといいますか自分用に買ったことを覚えています。修学旅行から帰って来てから勉強机に置いて金閣寺の美しさに惚れ惚れしていました。今から考えると随分と渋い小学生だなと思います。**

**これは何も金閣寺だけではありませんが、有名な神社仏閣の近くには必ずお土産物屋さんがあり、そこでその建物の模型が売っているものです。そして観光客はそれをお土産や自分用に買っていくのです。そうやって小さな模型が売っているということは当然それを作る人がいるわけです。その職人さんたちは模型を作ってそれが売れることで収入を得て生活が成り立つのです。それが様々な事情で売れなくなってしまったら、模型を作る職人さんは収入が絶たれて生活が成り立たなくなるのです。**

**今日の聖書箇所に出てきます銀細工師デメトリオがまさにそのような職人でした。彼はアルテミス神殿の模型を銀で作ってそれが売れることで収入を得ていたのです。エフェソの人々は町は、アルテミスという女神を崇めていました。土着の宗教です。その像を写真で見ましたが、たくさんの乳房を持つアルテミスの女神は豊穣と多産を象徴しているそうです。また金融や商業の神でもあったそうです。このエフェソにはアルテミスの女神を祀っているアルテミス神殿がありました。それは非常に立派な神殿で、縦115メートル、横55メートルで、高さ18メートルで127本の円柱からなっていて世界の七不思議に数えられるもののようです。人々はそのような非常に立派な神殿にお参りに行って、そこで神殿の模型をお土産物などに買って帰るのです。**

**ところが、パウロが2年以上に渡ってエフェソの町でイエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝え、「手で造ったものなどは神ではない」と宣べ伝えていました。そうすることで先の20節に「このようにして、主の言葉はますます勢いよく広まり、力を増していった。」とありますように、イエス様を救い主と信じるキリスト者が増えていったのです。そうなると、アルテミス神殿の模型が以前ほど売れなくなってしまったのです。デメトリオは売り上げが落ちて収入が減ったのはパウロのせいだと考えました。彼が26節にありますように「エフェソばかりでなくアジア州のほとんど全地域で、多くの人を説き伏せ、たぶらかしているからだ」と考えたのです。この「たぶらかす」の言葉には「背教させる」という意味があります。パウロがエフェソの人々のアルテミスを信じる信仰を捨てさせて、なにかわからんキリストなるものを信じさせていると考えたのです。これでは我らの商売あがったりだ、が彼の本心なのですが、デメトリオはエフェソの人々の信仰心に訴えてパウロがアルテミスの女神をもけなしていると訴えたのです。**

**これを聞いたエフェソの人々はひどく腹を立てて野外劇場に押し寄せて大きな騒動になり大混乱となりました。パウロの同行者のガイオとアリスタルコが捕らえられました。その騒動は集団ヒステリーのようになり、人々はもはや何のために集まったかさえわからない状態になりました。そして「エフェソ人のアルテミスは偉い方」と2時間程も叫び続けたのです。**

**この騒動にたまりかねた町の書記官は群衆をなだめます。そして、もっともらしいことを言って群衆を解散させるのです。彼はさりげなくパウロたちを助けたとも考えられるのですが、町の書記官は自分の担当する町で大きな騒動が起こると自分より上の立場のローマ当局から咎められて、下手をしたらどこかに飛ばされるかもしれません。そうなっては困るので彼は騒ぎを納めたのです。それはパウロのためやましてや神様のためというのではなくて、自分のためです。自分の利益を第一に考えてこのような行動に出たのです。**

**銀細工師デメトリオもそうです。彼は純粋にアルテミス女神への信仰を守るためではなくて、神殿の模型が売れなくて困るから、今までの生活が維持できなくなるから、営業妨害をしているパウロへの腹いせに群衆を扇動して騒動を起こしたのです。彼もまた自分の利益を第一に考えての行動だったのです。**

**そして群衆に至ってはもはや自分が何をしているのかわからない状態です。それはまさに愛がなく騒ぎ続ける、騒がしいドラ、やかましいシンバルのようです。**

**一方パウロと彼の仲間はどうだったかというのが30節と31節に記されています。騒動が起きてガイオとアリスタルコが捕らえられた時、パウロは身の危険も顧みずに群衆の中に入ろうとしました。しかし、弟子たちつまりキリスト者たちはパウロを危険な目に遇わせてはいけないと体を張ってパウロを止めました。そして、アジア州の祭儀をつかさどる高官たちはパウロに使いをやって騒動の起きている劇場に入らないように頼んだのです。**

**パウロにしてもキリスト者たちにしても高官たちにしても共通しているのは自分の利益を第一に考えていないことです。自分が得するとか損するとかそのようなことが判断基準でなく、人のために行動しているのです。さらに言えば彼らは愛の動機でこのような行動をしていると言えるのです。他者への愛、神様への愛、そのためにパウロもキリスト者たちも高官たちも行動をしているのです。愛があるからパウロたちはこのような行動をするのです。**

**21～22節にはパウロがエルサレムに行くことを決心し、さらに「わたしはそこへ行った後、ローマも見なくてはならない」と言ったことが記されています。第3次伝道旅行でエフェソの地で2年以上伝道してきたパウロは大きな決心をするのです。21節の「決心し」はこの言葉だとパウロが一人で考えて「さあ行こう！」と決心したように思えますが、元の言葉では「聖霊の内に決心し」です。パウロ一人ではなくて聖霊がそこで働いて下さって、聖霊の導きでパウロはエルサレムに行くこと、さらにはローマに行くことを決心したのです。**

**エルサレムに行くことは伝道活動の報告とそして献金を届けるためと考えられています。愛の業です。そして、まだ見ぬローマに行くこと、当時ローマ帝国の植民地にあったその中心地に伝道に行くこと、もちろんそれが大きな目的です。しかし、同胞のアキラとプリスキラがローマから退去させられたことを聞いていたであろうパウロにとって、ローマへの道はどう考えても非常に危険な道です。まるでイエス様が十字架へと向かうような苦難と困難に満ちたイバラの道をパウロはあえて歩もうとするのです。ローマの人たちにイエス様の愛を伝えたい、十字架と復活の救いを恵みを伝えて一人でも多くのユダヤ人も異邦人も救われて欲しいその愛の動機でパウロはローマに行く決心をしたのです。**

**しかし、パウロはすぐには旅立ちません。今すぐに旅立つことが神様の御心ではないと祈りの中で導かれたのでしょう。テモテとエラストをマケドニア州に送り出して今はエフェソに留まりその時を待つのです。伝道への熱い思いがあるなら今すぐにローマに向けて出発することが神様に喜ばれることのように思うのですが、そこがパウロの素晴らしいところだと思うのです。あくまでも祈って主の御心を問うてその時を待つのです。主を愛し主に信頼しているからこそなせる業なのでしょう。すぐに旅立てばこの後の騒動に巻き込まれることもなかったかもしれないのに、パウロは愛をもってエフェソの町に留まって、この騒動において愛の業をなし、またパウロも愛によって守られたのです。**

**今日の説教題は「愛がなければ」としました。自分の利益また自分の事しか考えずに行動をする銀細工師デメトリオ、町の書記官、群衆たち、彼らの姿を見ていて私はⅠコリント13章にあるように愛なく騒ぎ続ける騒がしいドラ、やかましいシンバルを思いました。いや、愛はあるのでしょう。それは自己愛です。自分が一番かわいい、自分さえよければそれでいい、自分の生活さえ守られればそれでいい、自分を愛する愛、その自己愛から自分の主義主張を騒ぎ立てるその姿は、他者への愛のない姿だと思います。そして、この姿って今の私たちの社会と同じではないかと思うのです。自分さえよければという自己愛に満ちた社会です。自分の主義主張ばかりを繰り返し、自分と異なる考えを全く受け付けようとしない。物事の効率ばかりが重視され、他者への愛や思いやりを持っている余裕がない。何か非常に冷たい社会の中を私たちは歩んでいるような気がするのです。**

**そのような世の中にあって私たちはどのように歩むのか、それがパウロや仲間のキリスト者たちが示した歩みです。何よりも神の愛です。神様がイエス様の十字架の死と復活によって私たちを愛して下さっている、その愛に歩むのです。もちろん私たちも自分が一番かわいい自己愛があります。自分さえよければそれでいいという思いが私たちにもあるのは事実です。その自己中心的な愛に縛られている私たちのために十字架にかかって下さり、大きな愛を示して下さったイエス様の愛に立ち帰るのです。愛されている者として愛するのです。赦されたものとして赦すのです。神様を愛し隣人を愛する愛に生きるのです。常に主の御心を祈り求めて、主に信頼して、主が私たちに何をなそうとしておられるのかを祈り求めて、時にはその時を待つのです。そこに留まり続けて神様の示される時を待つことも大切なことなのです。そして、その場所に置いて愛の業に励んでいくのです。**